胆沢平野開拓の祖
後藤寿庵福原就封（しゅうほう）400年

水沢区福原地区にある寿庵廟。
寿庵の胆沢平野開墾の祖としての功績を讃えて、昭和６年に地域住民により建てられた。現在も、地域住民による管理が行われている。９月には寿庵就封 400 年記念碑を建立する予定

今から４００年前、キリシタン領主の後藤寿庵が福原の地に就封。

この地を訪れた、外国人宣教師が「このたび訪ね、布教せし、伊達の国、後藤寿庵の地いさわ見分の封地は草木伸びず拓く水なく住む人みな飢えて粗衣、粗食、食するも喉をとおらず、アラビアの砂漠を旅するが如し」と記しています。

このような荒れ果てた地に、寿安堰を開削し、豊穣の地の基礎を築いたのが寿庵です。

【寿庵の生涯】

寿庵の生涯は、謎に包まれています。奥州の豪族葛西氏一族で藤沢城主（東磐井郡藤沢町）の岩淵近江主秀信（いわぶちおうみのかみひでのぶ）の二男として生まれ、幼少の頃は岩淵又五郎（またごろう）と名乗っていたという説が有力です。葛西氏は、豊臣秀吉の天下統一で滅亡。寿庵は全国を転々とし、現在の長崎県五島列島に渡ったと伝えらています。そこで寿庵は、西洋の土木技術や鉄砲の扱いを学び、キリスト教を信仰するようになりました。名前を五島列島から五島（後藤）、クリスチャンネームのジョアン（寿庵）と名乗るようになったのです。

西洋文化の習熟を認められ、伊達政宗に使え慶長16年（1611年）、見分の地（胆沢区南都田から水沢区見分森、福原）に１２００石の領土を与えられました。寿庵は、聖書の福音（ふくいん）にちなんで、見分の地を福原と改めたのです。

間もなく寿庵は、大坂冬の陣と夏の陣に鉄砲隊として参戦したとの記録が残っています。

その後、寿庵は荒れた領地を開墾するため、私財を投じ胆沢川の上流から水路を引く開削工事に取り掛かりました。また、生活が困窮（こんきゅう）している農民の年貢を４割減らすなど、領民に尽くした領主でした。

徳川幕府でキリシタン禁教令が発令され、伊達政宗からの改宗の勧めにも応じず、寿庵は福原の地を後にしたといわれています。寿庵のその後は、さまざまな言い伝えが残っていますが、最期は明らかになっていません。

近代になるまで、寿庵の功績の多く語られることありませんでした。大正13年、寿庵は寿安堰開削の功績が認められ従五位を授章。バチカン市国にはキリシタン領主の寿庵がローマ教皇に宛てた、書簡「奉答書」が現在も保管されています。